



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

金魚2

ちよつと前に「金魚ものを集める宣言」を、この連載でした。魚系の図柄が好きだからとかなんとか…。自分でそういうことを言うと、人間というのは不思議なもので、自然と気になるのか集め出すものである。

おかげで今年は金魚の扇子や、金魚の浴衣なんてものまで徐々に集め始めて、金魚好きで通ってきた。関西には奈良にやまと郡山というところがあり、そこは「金魚の町」と呼ばれている。夏だったので金魚すくい大会なども催され、つい足が向いた。

PIE BOOKS とつう出版社から出てる「Kingyo」という本も買った。

古今東西の金魚のレリーフや、種類が紹介されているアート形の本だ。今では私のお気に入りのお金魚は、「黒の蝶尾」と種類で答えられるほどの金魚通である。なんにも自慢にならないとは思うが…。

金魚は華奢で、小さくて、可愛らしい。人間が観賞用に作った魚だが本来は鯉の一種だったらしい。家の中サイズに改良され、見るためだけに存在する。だからこそ、その運命的なはかなさが魅力的なのかもしれない。

私のお気に入りには赤よりはまだら、まだらよりは黒である。黒い金魚は不思議な生き物だ。可愛くはかない赤い金魚に比べると、なんとなく小悪魔的な感じもする。小さいくせに怪しいところがいい。「黒い金魚集めてるねん」と人に言ったら、「？」という反応が返ってくるのもうなずける。

しかし、さっきも書いたように人間、集める気になったらけっこう目

につくものである。黒い金魚なんて売ってないだろうと思いがちだが、意外なところで見つけたりする。写真はつい今週見つけた、浮き玉である。「あ、黒い金魚の浮き玉や」と喜んで買ったのだが、奇妙な感じだった。赤い金魚とか、せめて赤と黒が混じっているならまだしも、黒い金魚だけが描かれているのだ。「こんなもん買う人おるんかな？　つていうか、誰が黒い金魚の浮き玉が売れると思って作ったんやろう？」と買ってる私が一番不思議な気持ちになった。

今、一番欲しいのは、黒い金魚が墨絵で描かれた扇子である。それか、白地に墨絵で金魚の描かれた帯。そんなものないか、と今は思っているが…今度のように、念じればやがて目に入ってくるかもしれない。そんな期待を心のどこかでしている。

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
